

## [58] マシュー・ボーン振付『白鳥の湖』日本初演

### ～ジェンダーを超える真実～

2003年3月8日 東京新聞 夕刊

動物にも人間から見て男性的なもの女性的なものがあるが、では白鳥はどうだろう？ ギリシャ神話では、ゼウスが白鳥に変身して人間の女を誘惑するし、日本の神話だと日本武尊やまとたけるのみことが死後、白鳥となって飛び立つ。

しかしバレエでは、まさに特権的と言っている『白鳥の湖』によって、白鳥は女性美の表現の極致である。だがイギリスの振付家マシュー・ボーンは、同じチャイコフスキーの音楽を用いて、男性が白鳥を踊る『白鳥の湖』を作り上げた。一九九五年初演のこのボーン版『白鳥の湖』は、発表当時から大評判で、日本でもしばしば噂を耳にしたものだ。映画『リトル・ダンサー』に印象的な映像があったことも、評判に火をつけた。

意外なことに、物語の大枠は古典バレエとほとんど同じである。精神的に未熟な王子は社会的な責任を負いきれず、宮廷生活にストレスを感じている。第一幕、とびきりシックで何やらスキャンダルの匂いにする宮廷の客人たちをパラッチが追い回したりするところ、さすがイギリス製の『白鳥の湖』だ。

傷つき自殺を考えた王子が、満月のセント・ジ

## [58] マシュー・ボーン振付『白鳥の湖』日本初演

### ～ジェンダーを超える真実～

2003年3月8日 東京新聞 夕刊

エームズ公園で出会うのが白鳥たちの群れ。その中心的存在であるザ・スワンによって、王子は生きる希望を見出す。古典バレエではオデットというお姫さまだが、ここでは上半身裸でくちばしのよきな髪形をしたスポーティヴなナイスガイ。というよりほとんど無頼の風貌である。

このザ・スワンと王子のデュオがすてきだ。男同士の肉体がじゃれ合い、ぶつかり合って、爽やかな開放感がほとばしる。古典バレエとは無縁の動きなのだが、二人の動きや展開の仕方に古典の『白鳥の湖』の見せ場を彷彿とさせる場面が幾つもあった、パロディとして見てもなかなか手が込んでいる。

群舞も魅力的だ。古典バレエでは翼を揺るがせるような腕の動きが決め手だが、男の白鳥たちは背中で両手を組み、水上を滑る姿である。四羽の白鳥は足音高く走って登場、小ガモが遊ぶような元気な踊りで拍手を得た。

全幕を通じて感じたことだが、音楽の響きがちがう。特に第三幕では、聞き慣れたあの音楽がすばらしくダイナミックに、ほとんど激情的に盛り上がるのに驚いた。『白鳥の湖』は甘くて叙情的な

## 〔58〕 マシュー・ボーン振付『白鳥の湖』日本初演

### ～ジェンダーを超える真実～

2003年3月8日 東京新聞 夕刊

音楽かと思つたら、とんでもない。じつは頭と心にガーンとくるほど、激しい表現だったのだ。それも振付、つまり体の動きが曲を増幅させるせいである。『白鳥の湖』の音楽には、純愛の情感だけではなく、きわめて深い苦悩が隠されている、と言ったのはロシアの振付家ワシリエフだが、そればかりか激情と暴力もあることを、このボーンの振付で感じることができた。

古典バレエでふつう諸国の踊りのデイベルティスマンと呼ばれる部分では、チャールダーシユもポロネーズも濃厚なエロティシズムを発散している。あの楽天的なナポリの踊りまでが、けだるい官能に白い立つようなのだ。

開幕の舞台中央に大きなベッドを置いて、就寝の場面で始まり終幕にそこへ回帰するというところはブルーストの長編小説を思わせるが、それよりもチャイコフスキーの音楽の深層を深くえぐったことで、そこにこの大作家と大作曲家に共通する同性愛の鉞脈を見事に掘り当てたと見るべきだろう。そのためにこのバレエは、決して特殊な世界に閉じこもるのではなく、セックスとジェンダーを超越した、ある普遍的な真実の表現になりえ

## [58] マシュー・ボーン振付『白鳥の湖』日本初演

### ～ジェンダーを超える真実～

2003年3月8日 東京新聞 夕刊

ている。

ザ・スワンを踊るアダム・クーパーは、当世好みの風貌と全身から光を発するような存在感、凄みのある演技によって、文句のつけようのない圧倒的な印象だ。しかし、この役には幾通りもの解釈と表現が可能なはず。トリブル・キャストの一人として東京バレエ団の首藤康之が踊るザ・スワンにも独特の味があるにちがいない。

終幕、ベッドを突き破って出現するザ・スワンは白鳥たちに激しく攻撃されて、星空で王子と抱き合う。愛は自らの属する集団を離脱することで成就するのだろうか。